

廣田くんのこと

中村 龍介

廣田紀男くんは高校時代からの友人の一人。私の周囲では最もユニークな経歴の持ち主だ。

慶応大学の英文科を卒業後、雑誌記者として世に出たが、やがて将来に展望なしと判断して進路を大きく変える。次に選んだのはプロの将棋指し。大阪の高島八段の門下生となり将棋道を邁進。四段まではスイスイと進んだ。ある日、神戸から来た奨励会の少年と対局して惨敗。小学生に負けたことに前途を悲観して将棋界から足を洗う。この少年こそが後の強豪、谷川浩二永世名人だったという。

次は何故か医師に挑戦。全くゼロからのスタートだったが、鹿児島大学医学部に入りなおして猛勉強。更に、アメリカのカンザス大学に留学し研鑽を積んだ。帰国して、栃木の自治医大病院に職を求め、病理学の分野で頭角を現わす。そして、六十近くなって独立し、病理学研究所を設立。現在、二十名近くの所員を抱え、所長として活躍している。

彼の趣味がまた凄い。木工細工と化石のコレクションだ。栃木の自宅近くに自前の木工所を保有し、テーブルや椅子、更には手の込んだ箆笥まで自分で作る。

化石の方はもつと驚く。日本での展示即売会だけではなく、世界各地に化石を求めて旅をする。集めた化石は数百点。中には値段のつかない貴重なものもある。研究所の隣にあったパブを買い取ってギャラリーに改造し、そこに集めた化石を展示している。立派な『廣田化石博物館』である。ここまで来ると、趣味を通り越して病膏肓に入った感がある。

その廣田くんが研究所創立十五周年のパーティを開催するという。場所は宇都宮グランドホテル。鮫島男爵邸の跡地に建てられた、敷地二万坪を誇る老舗ホテルだ。

師走の慌しい最中、万障繰り合わせて出向いた。華やかな雰囲気好きな廣田くんの気持ちを汲んで、同窓生の元美女二人を誘い、木枯らしの吹く東北自動車道を飛ばした。土曜の夕方、慌しい時間の出発だったが、道中大した渋滞もなく、

二時間ほどでホテルに到着した。

翌朝は素晴らしい青空。名高い庭園を三人で少し散策した。広大な庭を覆う芝生は既に枯れて白くなっていたが、全面に冬の陽を浴びて、ささやかな暖かさを演出していた。所々にバランスよく配置された樹々がその葉を様々な色に変えて、それぞれの自己主張をしているようだ。薄氷の張った池では数枚のモミジの落ち葉が無機質な氷の表面に彩を添えている。歩を進めるたびに足元で砕ける霜柱の感触が心地よかった。パーティは十一時から始まった。会場の大ホールには十人掛けの円テーブルがズラリと並び、著名人の結婚披露宴のような雰囲気。出席者はざっと二百人足らず。高校の同窓生は我々ともう一人、四人だけだった。

正面の舞台では来賓の挨拶で幕が開くが、○○病院院長といった肩書きの面々が次々に登壇し、同じような話が長々と続く。いい加減退屈した頃、本日のメインイベントとなった。米澤傑氏によるオペラのリートとカンツォーネ。この方は廣田くんの後輩で、表の顔は鹿児島大学医学部教授。同時に、著名なオペラ歌手でもある。「天は二物を与えた」とマスコミにも紹介されるだけあって、迫力あるテノールにコンサートホールで聴いているような錯覚を覚えた。

次はいよいよ廣田くんの登場。これまでの華麗なる転身を披瀝した後、化石の話に入った。正面にはスクリーンが二面設けられ、自慢の化石の写真が次々にパワーポイントで紹介される。大方の来客にはあまり興味はなさそうだが、本人は大得意で解説を押し売りする。話したくて仕方ないのだ。

この日、彼が力説した化石は『ストロマトライト』。これは、二十億年以上前の地球上に誕生した『シアノバクテリア』と呼ばれる藻の一種が、光合成を繰り返す間に分泌する粘液によって砂などが固定され、縞模様の岩石となったもの。彼はこの化石をオーストラリア西海岸のシャーク湾まで出向いて入手したという。尚、このバクテリアによる光合成が地球上初めての酸素を創りだしたとされる。ということは、我々の生命の起源も二十数億年を遡れば、結局この化石にたどり着くわけだ。

一時を過ぎた頃に漸く昼食のスタート。食事の間も各種の



「ストロマトライト」の小片を
 研磨したものをお土産に戴いた。
 私には化石の価値は分からないが、
 20億年以上昔の石ということに
 ロマンを感じる。
 地球が誕生して45億年。その半分を
 この化石は見てきたことになる。

アトラクションがあり、研究所の所員たちが登壇して、自己紹介、花束贈呈、カラオケなどが延々と続いた。最後は廣田くんがアメリカ留学時代の想い出を歌にこめて『テネシーワルツ』を熱唱。彼はロマンチストでもある。お開きは四時半。五時間を超える大パーティーであった。「今日はよく来てくれた。ありがとう」帰り際、廣田くんは私の手を取って感謝の握手。その力強さに彼の真意を感じた。遠隔地に暮す廣田くんを、私はこれまで陰に陽にサポートしてきた。健康状態が万全でない彼への同情もあるが、何といつても彼の人生を大きく変えることになった二度の決断に心からのエールを送りたい気持ちからだ。自己顕示欲の強い廣田くんは自身の自叙伝を出版したいと強く望んでいるようだ。その執筆を私に頼みたいというのが、これはお断りしている。が、出来ることなら書いてみたいというのが本音である。今回のパーティーに参加してその意欲はますます強くなった。

(了)

〔二〇一二年十二月記 原稿用紙五・五枚 課題「歴史」〕